

Mr. Bassman (ベースマン列伝) Vol.9

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変…。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Ray Brown【レイ・ブラウン】



DownBeat Archives

Profile

1926年10月13日米国ペンシルヴァニア州ピッツバーグ生まれ。本名は Raymond Matthews Brown。8歳の時にピアノを習い始める。高校時代にベースに転向し、ジミー・ブラントンのベース・ラインなどを聴きながらベースを習得。卒業後に地元で幾つかのビッグ・バンドで活動後、スヌーカム・ラッセルのバンドに参加。45年にニューヨークに進出し、チャーリー・パーカー、ディジー・ガレスピー、バド・パウエル等と共演。翌46年にはディジー・ガレスピーのビッグ・バンドに参加するなど、バップ全盛期を支えた最重要ベーシストの一人として活躍。私生活では、48年に最初の妻となる歌手のエラ・フィッツジェラルドと結婚し、エラの音楽監督を務める(4年後に離婚)。50年、ミルト・ジャクソン・カルテットの一員として、MJQの前身コンボに参加(後に、後任のベーシスト、パーシー・ヒースに交代)。51年から66年までオスカー・ピーターソン・トリオで活躍。53年には、JATP (Jazz At The Philharmonic) と初来日を果たす。その後、ウエスト・コーストを中心に、L.A.4のメンバーとしても活動。70年代半ばには、ミルト・ジャクソンと双頭リーダーのグループを結成。晩年はベニー・グリーンやジェフ・キーザー等ベーシストを迎えたりオで活動するなど、亡くなる直前まで精力的にライブ活動を行い、ソロやサイドメンとして多くのレコーディングに参加。2002年7月2日、演奏のため滞在していたインディアナポリスで死去。死因は不明とされるが、ゴルフを楽しんだ後に昼寝をしていたホテルの一室で息を引き取った。享年75歳。

卓越したテクニックを誇るジャズ・ベーシストの手法

《ジャズ・ベースの巨匠》

人差し指一本による独特のピチカート(指弾き)が生み出すベース・ラインとソロ。驚くべき正確なピッチで弾きこなすアルコ(弓弾き)のテクニックも素晴らしい。その卓越したテクニックやサウンドをはじめそのトータル・センスから、「ジャズ・ベーシストを目指すなら、まずはレイ・ブラウンを聴け！」と言われるほど教科書的存在のレイ。この『The Walker's』の由来であるウォーキング・ベースの名手、リロイ・ヴィネガーが“歩くベースマン”なら、レイは“唄うベースマン”という感じになるろうか。

また、レイはアコースティック・ベースの名手だが、1971年にジャズ・ギターの名手、ジョー・パスがジャズ・ファンクに挑んだ作品『ベター・デイズ』(P-Vine Records: PCD-23789)では、グルーヴィーなエレキ・ベースによるプレイも披露している。そして、レイの死から9ヶ月後の2003年4月、レイと長年交流があり、生前一緒にCD作成の話もしていたクラシック界のコントラバスの巨匠、ゲリー・カーがジャズ・バラード作品『ブラウン・ソフト・シュア』(キングレコード: KICC-437)を録音しているが、この作品はレイの死で共演の夢が叶わなかったゲリーが、レイに捧げた感動的なアルバムだ。

一度だけ、間近でレイ・ブラウンに接する機会があったが、風格漂う恰幅の良さと色艶の良い顔立ちに、一瞬マフィアの親分的な凄みとオーラを感じたが、笑顔で優しくサインに応じてくれたその姿は今でも心に焼き付いている…。

《レイが完全プロデュースした日本人シンガー！》

1953年にJATPでの初来日以降、40回近く来日するほどの親日家でもあったレイだが、晩年の来日ツアー中に偶然耳にしてその才能に惚れ込み、デビュー作を全面サポートした日本人ジャズ・ヴォーカリストがいる。彼女の名前は鞠沙樹里(まりさ・じゅり)。1998年にLAで録音された彼女のアルバム『ライク・ユー』(P.J.L. MTCJ-1060)がその作品だ。レイが全曲アレンジ&音楽監督を務めたという熱の入れようで、レイが生前最後に希望を託したシンガーといえる彼女の存在にも注目したい。【鞠沙樹里オフィシャルサイト <http://www.malisajuli.com/>】

《レイ・ブラウンのベース教則本》

クラシックのコントラバス教則本『SIMANDL (シマンデル)』は、多くのジャズ・ベーシストが使用することでも有名なが、1970年代にジャズ・ベース入門者用の教則本の定番として位置付けられていたのが、レイ・ブラウン著の教則本『Ray Brown's Bass Method』だ。レイによる名スケールや名パターンの紹介、解説や写真資料も掲載されている。海外では「HAL LEONARD CORPORATION (<http://www.halleonard.com/>)」などで入手可能だが、国内でも大手楽器店で入手可能なようだ。ジャズ・ベーシストを志す人にはお薦め！

RB's Leader Album

ソロ名義やトリオ名義も含め、数多くのリーダー作を残してくれたレイ・ブラウン。『Something For Lester』、『Jazz Cello』、『Don't Get Sassy』、『Live At Starbucks』等もあがめです！

ピーターソン・トリオ在籍時の若きレイがウェア・ヴに残した自信作！



This Is Ray Brown
Ray Brown
(ポニー・ポニー・ポニー)
(ボニー・ポニー・ポニー)

モダン・ベースの開祖ジミー・ブラントに捧げたデューク・エリントンとのデュオ



This One's For Blanton!
Duke Ellington/Ray Brown
(ビクター・エンタテインメント)
(VICJ-41680)

コンコード・ジャズ・フェスティバルのライブ録音。レイのベースが最高！



Live At The Concord Jazz Festival-1979
Ray Brown Trio
(ビクター・エンタテインメント)
(VICJ-60933)

Ray Brown (b), Jerome Richardson (fl), Oscar Peterson (p, org), Herb Ellis (g), Osie Johnson (ds)

1. Bric A Brac 2. Upstairs Blues 3. Indiana (Back Home Again in) 4. The Nearness Of You 5. Take The 'A' Train 6. Cool Walk 7. Jim

タイトルからも「これぞ、レイ・ブラウン！」、「レイ・ブラウン参上！」と自信が漲っている。レイの若かりし頃の精悍な顔に、ビンの栓抜きのような形をしたウッドベースの弦巻が印象的なジャケットも渋い！ 1958年、脂の乗り切ったレイのピーターソン・トリオ在籍時、31歳の時の録音だ。ジェローム・リチャードソンのフルート、ハーブ・エリスのギターにオスカー・ピーターソンがピアノとオルガンで参加という斬新なサウンドが楽しめる。「A列車で行こう」のスウィング感〜「クール・ウォーク」で聴かせるウォーキングが最高。勿論、レイの職人気質のベース・ワークも文句なし！ レイの数あるリーダー作の中でも、決して出しゃばり過ぎることがなく、クールな自己主張をみせるこのアルバムが好きだ！

Duke Ellington (p), Ray Brown (b)

1. Do Nothin' Till You Hear from Me 2. Pitter Panther Patter 3. Things Ain't What They Used To Be 4. Sophisticated Lady 5. See See Rider [6-8: Fragmented Suite for Piano and Bass] 6. First Movement 7. Second Movement 8. Third Movement 9. Fourth Movement

録音は1972年12月。大師デューク・エリントンとレイの歴史的デュオ・アルバム！ 39-41年の2年間エリントン楽団に在籍し、「モダン・ベースの開祖」と称された伝説のベシスト、ジミー・ブラントン（42年に肺結核で死去）をレイに見立て、そのブラントに捧げた作品。「ビター・バンサー・パター」は、40年にエリントンとブラントがデュオで録音したナンバーで、後半の4曲は「ピアノとベースのための断片的組曲」だ。録音当時、エリントンは73歳、レイは46歳。ジャズ・ベシストとしての経験とテクニクは十分とはいえず、さぞかし緊張したことであろうが、レイにとってアイドルでもあるブラントの役割を果たした、偉大なエリントンとのデュオということで、気合の入りが半端ではない！

Ray Brown (b), Monty Alexander (p), Jeff Hamilton (ds), Ernestine Anderson (vo)

1. Introductory Announcement 2. Blue Bossa 3. Bossa Nova De Marilla 4. Marsha De Carnaval 5. St. Louis Blues 6. Introductory Announcement 7. Fly Me To The Moon 8. Georgia On My Mind 9. Here's That Rainy Day 10. Please Send Me Someone To Love 11. Honeyuckle Rose 12. Concluding Announcement

1979年8月の「コンコード・ジャズ・フェスティバル」の様相を収めたライブ盤。臨場感溢れるアナウンスの声に、カリフォルニアの真夏の空の下にすり鉢状に広がるコンコード・パヴァリオンの会場や、熱く盛り上がるオーディエンスの様子を想像させられる。そして、この年のハイライトとなったレイ・ブラウン・トリオ！ レイがモンティ・アレキサンダー（p）とジェフ・ハミルトン（ds）を従え、スタンダードを中心にこ機嫌なスウィングを聴かせ、スペシャル・ゲストのアーネステ・アンダーソン（vo）が登場するとオーディエンスの盛り上がりは最高潮を迎える。中でも「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン」は絶品！ 野外でのジャズ・フェスの醍醐味をとくと味わえる作品で、ライブで聴く威風堂々としたレイのベースは最高だ！！

RB's Support Album

下記以外のディジー・ガレスピーやチャーリー・パーカー、オスカー・ピーターソン・トリオの名盤をはじめ、この場ではとても紹介し切れない程の数多くの歴史的な名盤に参加しています！



Jazz At The Philharmonic 1949
Charlie Parker
(Verve : 519803)

チャーリー・パーカー（as）、レスター・ヤング（ts）をはじめ、ノーマン・グランツ率いるJATPによる1949年のカーネギー・ホールでの貴重なライブ音源。当時レイとは夫婦の仲でもあったエラも参加！



Toshiko's Piano
Toshiko Akiyoshi
(ユニバーサル : UCCV-9050)

1953年に当時23歳の秋吉敏子（p）が、ベースにレイ、ギターにハーブ・エリス、ドラムにJ.C. ハードを従え、東京のスタジオで録音した初リーダー作。デヴィッド・ストーン・マーチンによるジャケットも渋い！



The Poll Winners
Barney Kessel/Shelly Manne/Ray Brown
(ユニバーサル : UCCO-9088)

『ダウンビート』誌が「楽器別人気投票」で1位を獲得したレイ、バーニー・ケッセル（g）、シェリー・マン（ds）にトリオを組ませる企画として実現した名盤。1957年録音。同メンバーによる他の作品も必聴！



Way Out West
Sonny Rollins
(ビクター・エンタテインメント : VICJ-41701)

名盤『サキソフォーン・コックス』録音後、西海岸を訪れたソニー・ロリンズ（ts）が、レイとシェリー・マン（ds）という名手2人を従えて吹き込んだビジュアル・トリオによる傑作。ジャケットも必見！ 1957年録音。



We Get Requests
The Oscar Peterson Trio
(ユニバーサル : UCGU-7102)

言わずと知れたオスカー・ピーターソン・トリオの超名盤で、邦題は『リズ・リクエスト』。『コロコヴァード』をはじめ、ピーターソンの最高のピアノ＆レイのベース音もすこぶる心地良い！ 1964年録音。



Harlem Blues
Phineas Newborn Jr.
(ビクター・エンタテインメント : VICJ-41086)

レイとエルビン・ジョーンズ（ds）の共演も聴き所のフィニアス・ニューボーン Jr. のピアノ・トリオによる名作。フィニアス・ニューボーン Jr. の5年間に渡る空白期間を経て、1969年に録音されたアルバム。